

ふるさと見て歩き

第43回

鹿子の木と 月読神社

緒川地域松之草の月読神社には鹿子の木(カゴノキ)という珍しい木があります。

◇月読神社

月読神社は、松之草地区にあり、古くから地域の人々の信仰を集めてきました。もとは日月神社という名称でしたが後に現在の名称に改称しました。月読神社は長崎県の壱岐島にあるものと京都市の松尾大社の摂社が有名です。県内でも潮来市をはじめとする六社ほどが知られています。

松之草地区の区長が引き継いで所轄する区有文書の中には、昭和四年に組織された月読神社講(安産講)の名簿があります。この中に書かれている「趣意書」には、月弓尊(月読尊)と木花咲耶姫命を祭神とすること、古来から安産の神として名高く、信者が多いのでその霊験を広めるために講を組織したこと、春秋の二回大祭を執行すること、などが記されています。また、「規定」には講員五名を一組として、毎年各組から一名ずつ代参を出すことや、講金と



▲鹿子の木

して年間一人三十銭を集めることが定められました。

では、具体的にどのような方法で元の人々は安産を祈ったのでしょうか。それは鹿子の木の樹皮を削り取り、妊婦に煎じて飲ませる、という方法だったそうです。しかし、現在境内に生えている鹿子の木ではありません。戦前にはすでに枯死して伐り倒され、現在も社殿脇に安置されている先代の鹿子の木です。この樹皮を削り、煎じて飲むことでお産が軽くなる、という言い伝えが昔からあり、緒川以外にも樹皮をもらいに来る人があったそうです。今は切り取っていく人もなく、ひっそりと朽ちるのを待つばかりです。

月読神社では現在も春祭り(二月



▲飲めばお産が軽くなるといわれた先代の鹿子の木

十五日)と秋祭り(九月十五日)が行われています。当番と年番世話人の取り仕切りのもと、境内の清掃、注連縄張り、神主による御祓いが行われます。

また末社の素鷲神社の夏祭り(六月十五日)も行われています。こちらも同様に清掃と注連縄張りを行い、五品の供物をそろえて捧げます。昭和二十年代頃までは神輿の渡御が行われ賑わいましたが、世代交代や住民の減少により現在は行われていません。神輿を社殿から出してお祀りし、祭礼終了後に社殿で直会(お清めの飲食)をする慣わしになっています。

区有文書によれば、更にさかのぼって、大正五年には相撲興行が、昭和十三年、十四年には放棄大芝居が行われたこともわかります。芝居は栃木県茂木町飯野などから買ったようです。舞台が掛けられると周辺には出店も出て、普段は静かな山間の村も大賑わいだったことでしょう。

◇鹿子の木

月読神社の境内には高さが18mにもなる鹿子の木があります。樹齢は百二十年ほどと推定されています。

鹿子の木はクスノキ科カゴノキ属の常緑高木で九月頃にうす黄色の花をつけます。その後、翌秋に直径7mm程度の赤い球形の実をつけます。鹿子の木という名前に特徴的に示されているように、若木期を過ぎ

ると、樹皮が鹿の子まだらに剥げ落ち、鹿の模様のように見え、非常に美しい柄となります。鹿子の木は温暖な地域に多く自生し、本州では北茨城市が北限といわれています。



▲樹皮

鹿子の木には「ナンジャモンジャ」という別名があると言われますが、ナンジャモンジャは特定の樹木を指す名ではありません。この変わった名前には、一般的に正体が知れないものに対してつけられた名称のようです。多くの場合「ヒトツバタゴ」(モクセイ科ヒトツバタゴ属の落葉広葉樹)を指すようですが、地域によって様々な木を指すそうです。その数およそ三十種とか。この中に鹿子の木も入っているのです。ヒトツバタゴは愛知・岐阜県境および長崎県対馬地域にしか自生しない樹木で、雪がこんもりと積もったように白い花をつけるのが特徴です。天然記念物に指定されている場合も少なくありません。

〈参考文献〉佐藤茂「月読神社講社(安産講)について」『おがわの文化』27号(平成18年)。同氏には聞き取り調査にも御協力をいただきました。

歴史民俗資料館大宮館

☎52-1450